北越奇談

四

一〇五

北越奇談巻之四

北越　崑崙橋茂世述
東都　柳亭種彦校合

怪談

蒲原郡俺谷村慈光寺といふは村落とはなれ山林に入る
一里松杉千年の古木聳えそびえて誠に世外の幽境なり元弘の比
補正五郎入道して此寺に寂を今に正成の鎧直垂の書芳
をとどめて付藏ありと又時ありて仏法僧鳥慈悲心鳥の啼ける
と世人の山伏樵夫常とするなり此山殊に天狗甚おそれ
他方の者寄宿するときんさるべくの怪異とをしへて人と聚るを

一年六月のなかばなりし寺僧皆出て僕童一人留守せしまゝ
徒然なるまゝに髮長く生たる旅僧一人来り暫く住居て
僕に向ひていはく今日祇園の祭なるに此人なんぞ欲や
否と僕の曰願くは凡人とせばかりひとり不能旅僧即僕と伴
て去る忽数千の群衆陌にうち金鼓耳にかまびすしく錦
繡目に燦然として往日不厭幕におゝんで旅僧伴ひ入
ると即一ツの菓子盆に至り干菓一箱とりとめ瞬のうちに
寺にかへると凡人ども旅僧忽不見凡人ども怪しみ是を見るに
京二条通菓子屋某のもの又大工木挽なんど偶天
物のぼるとかへるときん忽其人の衣服なんどもとりてすがき

杖の柱に掛くれといんとをるとをるとをるとをる即堂頭にうびのうん
とゝ成侍へ爰に和尚袈裟をかけ其杖の下にいとり空にひらて
曰又いとゞとをなせるものうるおく衣服を主に返さるべと
即其衣服風に随て地に落ち成怪哉日くにして一とゝめゞて
いへべゝゞど

其二

享和三癸亥年奥州の士某越の柏崎に扨むく途中石地乃
駅にるとつぎて即その士るに先きゝ丁ばかくにて駅の
町とに出るとゝ乃くゝゞ忽ち成ちゝどる方をのとゝ成
ゝゞ行て先の駅椎谷にいとり向ゝに達と向ゝ其為ねと

ねの不来がゆくに不安る方是非なくかゝり来くゝ石地乃向
ゝへゝと町役即柏崎の侍ゝに行是にゝて人とゝゞ
四方とゝねゝ求れども不乃終に死せりとして其為ねと幸ゝ
にかくも扨かの士某年ばかり成ゝとゝゞて古郷にかゝり疾密に
已が家を叩けばくゞゝゝゝ其ゆくを向にゝゞめ石地乃
町とゝ成出るとゝゝ山伏一人出来りゝ相出ゝて乃ねど
にゝゞくゝとも其至るゝとゝゝゝゝ畳嶺絶壁路なきゝ乃為
谷成ゆくとるの空に花ゞゞゝ一日忽金閣王楼栽ゝゝ成
乃る依て其地名を問かの山伏の云是日光山ゝゝと士驚
き是を泳せんとゝれば忽美のさちゝるゞゝく平地出ゝく

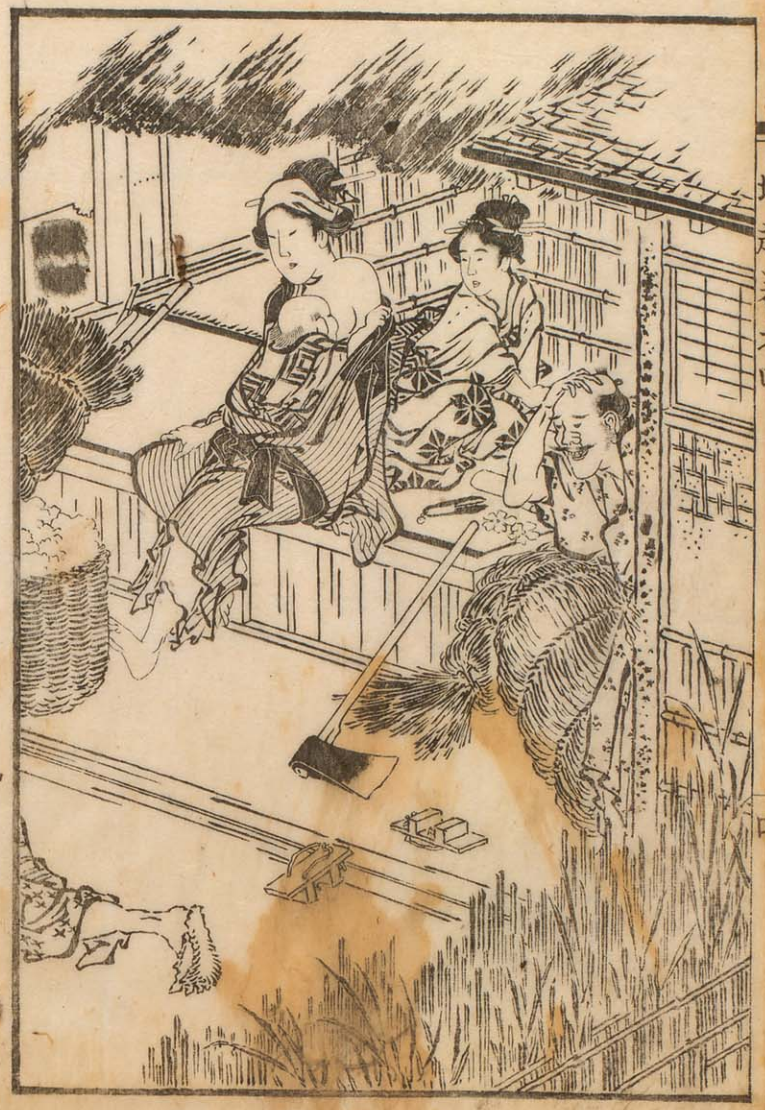
見れば古郷のごとしとなり

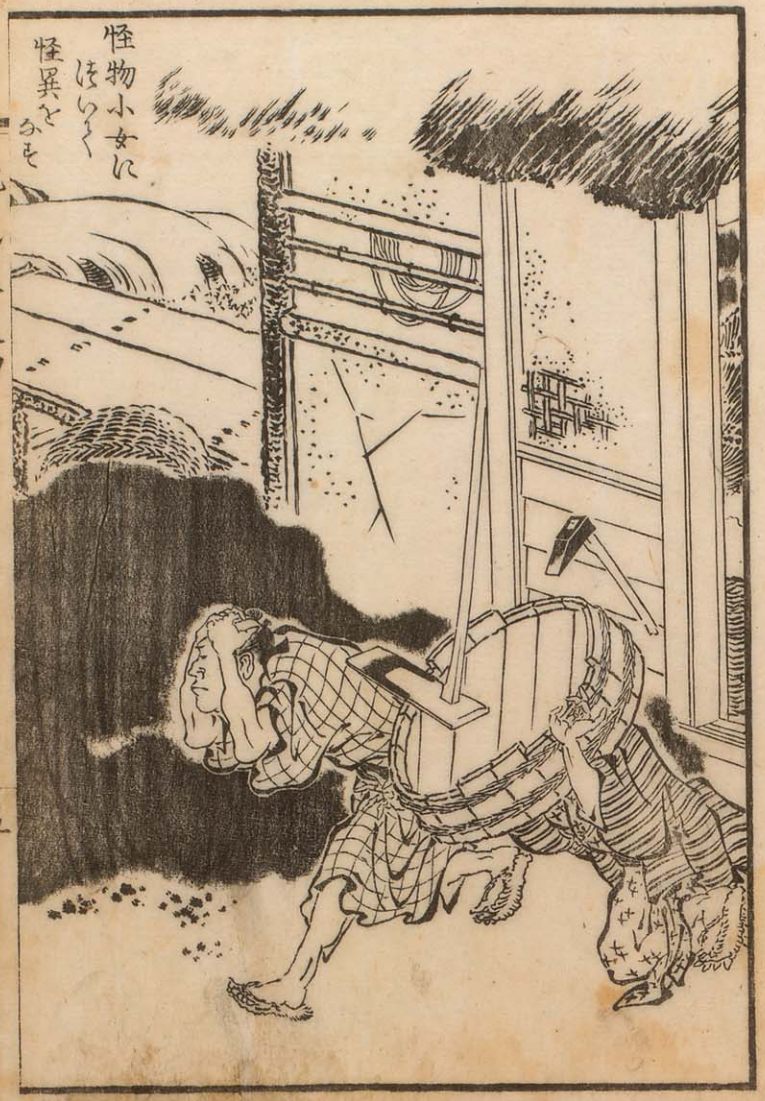
其三

寛政年中蒲原郡太田村百姓某の小女十二三なるべ
き頃の町祭礼見物に出て連れひとり群衆のうち式
ちぐ祝りくもるに面の赤き僧一人来り相伴て見物を小女
に食を勧め異僧即見を知り茶店にて其好むところ式
食さむ又町に出て小女に欲るる呼櫛弁とるく食物とる
仮小くも皆見よ天小銭とつくのんざれども賣人まと
うめど終に家にかくる其日より小女に求る呼なりどと
いとるー坐ーなぐうたるうのおをとーんと欲れば即死まりて

前にあり家人見るの中に小女をせむれば忽家鳴動し諸器物
おのれと表で人力をもつて制しがたし或ハ食せんとする時鍋
釜うんど忽表ぐ梁上にのぼる小女をいろいろ詰るとき即
表りて本のごとし数日近村競ひきたりてあれを見る
り誤て怪をそしるとき鍬鎌柿の類ひとりでに表まく
その人と打莫ごきの怪ありしが一月のうちにいつとなく
ふつり止ぬ○同年の秋村松山北河谷村百姓某近村より子を
の小女とかくるに一日連の童女相伴て村ーの茶屋に至り
各柿を求め食かの小女沙うして買求るとのうどひとり
見と云む忽面赤く老猿のごき僧の白衣なるぐまりて仮柿

とめうえんうと同人小女ところとび即店の柿四ツ五ツ盗のれと飛来り
小女が袂に入他の童女さらに見るるーそれより家にかく
行にしらどいんと盗人の皆来りて懐に入主人とれば
あやーと犯の家に返さんとすれば忽家財道具盗のれとび
やぐりて家の内より居り不絶小女をいろり上坐に待とる時
即止む村長見て少其家に来り小女が上坐にあるべきうう
旦怪と有合呼に忽其度よりかけをもとる脇一工来て面を
うえんと村長かどうき迯出れば又盗一ツ来て頭に傷人見
れうて村中以の行騒動一足和市をうろう拔即日其怪ヶ
を領主に訴人即足怪二人をして其実不絶足在けるうんとを




怪物小女に
ほいく
怪異をみる

于時足怪その家にいろり上座につゝ小女とせも同へ忽猜
あにゝり斧一丁表来て足怪の鬼がらゝとりて落足にう
て裏へいんとゝるとゝゝ数日にゝくいろとなく止ぬいろ
うゝゝ怪異ともゝゝど足ホも皆天狗のなとりぐうゝ

其四

安永の頃坂巻村貧民某の女月郷酒造の家に奉公せゝ二月
二日乃刻傍柴に詣ていゝ今暁夢に大弘帆とゝりて我宅の
窓の下にそゝき其帆柱の上白き雀一ッ止てゝゝりゝ表ぐ
懐のうちへ入ゝりとゝり皆ゝ少て其夢の吉ゝんとゝ
祝ともの女ゝろとんで笑とゝゝ大着にて炉の灰とゝゝ

それ忽渉二百文のり主人怪てかの女のなとをかくせるゆゑんを
已よりて又二百文を灰の中より出せ家人大きにあやしみ皆く
炉中に求れども一ものもなしかの女火箸をとれば忽然と
して渉のりそれより女決とさびれ渉のり懐を開けば即銭
のり至る呼旦自然に渉のりて不絶と主人その怪を日くを釈
のりくにかくを女家に至るとき已に銭十五貫文をとる人くる
めやてかくを依て新深他門舟問屋某の家れを公を一日
茎を川岸に捨るに忽紙にてをるものの取あげてみれを
それべ遺金三十五両なり後に捨てる主ゆゑ見を以他の家
に嫁して今ゆゑ富見ゆ織に奇怪ものりぐきのどもを

其五

地蔵堂の西糸井湖の辺七ケ村と云る呼のり農夫某ある
者秋の末過る頃ゆゑんのる夜家人皆寝くひとり炉の下
に縄とめざうゑ居けるゆ夜いてゝ戸て窓にぐゝと雨の一ト
ちきりかゝる者ゆ歩く其めと寂寥と扣とどくなり後に縄
をとりてあき国に入ゝ臥けるゆ翌日早く起出てみるにその
のりにえるれざる木の美青黄打まで早く一ト食だり
有いなりいざともるとゝる時に其婦飯とかきいりて
家内打寄食んとするに釜中飯已よむゆ家人おどろけた
其食ゝるのゆちゝどそれよりして仮とゝきていろにも

ちくかく〜霞ふと人ども忽食ひつくしてゐ〜いつなるものゐを
ひざとも目れ尼るとゐけれバカ不及ゐ武ゐるを数日家にあり
て食とるを不然依ゐ家内皆外に移り空屋にして住ざる
を一月のもり後之住りて仮をかゝゝる其怪已ゐ去りて元乃
ど〜いつなるものゐ本業にかゝる〜来るく人の食を貪りけん
ふ〜ぎ
不思議とも武ゐるもあり

其六

夜釜焚とつるを小児の比伽ぢゐ〜とのゝ公ゐくるに近来秋
武怪あり頸城郡高佐村塩坪某の家未夏の夜遠くゐそびく
子の時ちくるに比ひとり住りまるに村のた〜四ッ辻のゐ〜りに来き
火忽ゐ人て又きゆるゐ武ゐるを数度彼男却りひらく朋友つもざ
涼ゝ居るゐ〜んと却て見を載れ驚さんゐゐれぬき居て
密に窺ひ見れバ隣家某の二男なり両の脚をゐ武以徒
をかくてうつゐく地上に坐〜その両足の百よりゐゐくとまき
火燃出るを一人ざり面色ゐざゐ皮肉ゐせゐとゐ〜
かの男ゐもりにゐどゐきアット声を出せバ化物顔をゐげ彼
男をんく苦ゐ笑ひ忽きえうせく尼人どかの男ゐゐく
走りゆりて臥〜ぬ数翌起いもゐ〜ゐ〜ゐる頃主人見
に命ぢく馬の草を苅〜むかの男起出く涙なゐく携人山岡の
草壁に至り見れバ細川を隔く早く来て草を苅るものあり彼

男細川と一紙にしるす誰ぞと問とかく其人のとふりむきさる顔をみれば此夜の辻に火を焚くる男なりわれに打撃るきくるものもいとをとれば其者のつるゝ必此夜のと人に語りてしるるゝと此一言に再び乙撃まくるゝ少げ攻けるがそれより病に臥し不起と十日のうちつゐに其村に居ると不能主人にいとゝ乞ふて却のれが里にかへりぬ同大光寺村鍛冶某の母近来此怪あるゆまゝ見めぐらす人夫〳〵此怪ある人の三年ゆゝぞして必神気衰て死を徳て此怪南山でき畑の土に文り石鏃雷斧石鏃ホを出をと夫〳〵予去年乃爽此地にいとうしるにむゝ〳〵兵火のゝあに焼れゝる戦場と

却行人て焼石瓦土器おゐど却ゝ〳〵然れば予是を按ずるに此怪も侍戸男の類にゝ〳〵若愁の夫畏孫に乗ゞ人に付て此怪崇をなゝる不已矣ゆゝ〳〵一奇なり

其七

海上の奇ゝ難〳〵その中幽夫舟といふるの常に人乃却ゝる所なれども去寛暦の秋五ヶ濱船頭孫助とゝふる者水色に人乗順風に帆をとりて松前を出三日とゝふる佐州の沖越後新潟と異の方に見ゝる頃俄に逆風落きゝて裏帆引去ゞて船已にくがゝんとゝ舟子あれて之さんぎ落おと打帆柏きゝだやなんど狼狽まゝるに行ど

なく怒浪山のごとく折かさなりて頂の上に崩れかゝり忽舶
さけ抽くだけて古人の者共海底の魚腹に入ることと
とゝまりぬたゞるに船頭孫助一人波上に浮出るあり扨
舟の破れさけたる板一枚巾二尺ばかりなるを取てさゝりて
孫助うれしく浮木の亀とおもへに取つき一息つきたまけ
ぬやゝあると足間ども日ゝ已に暮たるに風雨目にをひき
ぐゝ鯨浪千尋の底よりつきかつゝく咫尺をわつゝね晴夜狐
べゐれと依州いゞれと越後の方をもたゞゝざれへ志しそ
去るべきことゝもあり然れどもりや命のことゝるこゝやと
心中に金毘羅宮を念じ伊夜日子に立願して只一片の落板と

船頭孫助
洋中にいでゝ
よひて
幽霊船を
入る

力にゐづくともなく漂居るが大波ちからにうちくだくを心底に
ちつむと知りべ又深く心をうにまんとそぬぐ人〻計り
しも忽仲のかさとり大勢の立騒ぐ中〻〻〻〻に抜切れ
荷物うて揖を出せなんどゆうく其舟已に程ちかきうり
うれば孫助うをーく何卒〻〻代あにうけのせ行うだや
く彼間より顔さいづてとれうれば其あをでにはさけ
うづけうるどく十人ばかりの舟子左右に立さわぐあり
さまさまに生るへとも知ぬを面まざめ疲れくうるる
姿めやもちぬ闇なれども紙のどくりの人〻右の方
を漕とり隙の目に数十丁ばかりを忽一時にアッと叫ぶ

声して其あぶらくくと打ちぶけ出ぶくうせてあり波ぶくと鳴りてる声のこなり越八幡宮のものなるへし二仏は仏神を念じてよく居るうちに又ちめのごく立強くおしく声ぐにはりく其あのうぶけうる呼に至りて忽法叫びて消うせぬ武なること幾度とつとそ式ちつどるに魂とび出ゆるぶとし已にしく夜も明りれば風もこしやきれどもとかるべき舟もあつどれと同当の山本ともに又ひくとなりれば次第に波よりよれ潮に引れて森湯さる蒼海にてよく居ると二日二夜なり漸くに波風ちづまり空小しく晴されども力つれ目もくらくくれく戊浦山をわきまへがたく又ちきうに餓かりきうれども口に味へべきものもなく已に命も絶へぬべき呼にあるにともちぬ菓芭一ツ波にゆれてあぶれ来れり孫助南くに芭をとり用きて見るに赤き蕃椒二つあり即是を食るよさくに辛ともおぼへず腹の空くるまゝに十ばかりを食りければ忽餓をちのぎ仏力さらあるなるよ式おぼへて其餘を首にかけうる時八一ツ二ツを食りつるに三日に及びける紀佐州の方より船一艘帆をとろて来れるあるまりにれしく舟の向へかく式仏かけて力をおくして游ども渡さる海上只一ツ呼に居るがどし漸く船ちかくなるわどにちきうに声を立れども音うれて不出そんせんと

りぐくるゝゝゝゝしぐ忽一計を却りひ出ーかの茱萸とよにさ
あげくゝあの方をまゝ行きけれがかの乃犯父兒を見付ゆさる
人のひざるゝんゝ恍を下げ櫓を却て漕来り竟ぬ孫助を
引あげさるぐに夕抱ー才を煙糊るどもめゝゝりければ家く
言祢ひり姫ゝりの粮雑をおがるに乃の者ども大に喜き
まゝに命づゝき人るゝて後に兒を送りて新深にいゝりぬ
予寛政丑の夷かの地にゝゝく数日逗留せーにある日七十
ぐりの老人来りてお見申宿のあるぐ仏老人と指さゝく仏
翁ゝてかの命づゝき人ゝりゝて口ひぬ予其実氏問にかの老
人の曰咄ーひいゝ安く行れども其粮雑をゝるゝとゝに才のけ

ゝぐらひまく才の毒ゝぞんゞ其後ハ不治とゝり今已に七十
三歳とゝぞ誠に命ハ天にあるものゝ

其八

世に幽灵の怪談甚ざおわーと人ども諸四古今皆お類とるの
話のゝにゝていつまぐ真ゝゝとゝべきの説とゝゝゞゞと予壮年乃ゝろ
池端ゝ居ありゝ内田間十余丁を隔て圓福寺とゝる禅院
あり五月ゝの比ゝゝゝん終日雨にあゝび夜いゝゝ行て帰り来る
に連日の梅雨小川の水ゝゝゝり橋已ゝ落ゝいんゝもゝべきやう
なゝ依て寺の後にりゝり橋とゝゝゝゝべきものやゝとゝゝこ
枝の森深く古墳累ゝと只数十の卒都婆あるのゝ其中大なる

卒都婆に對して独言して曰亡者我今此卒都婆をかり宿とす
りてうんとして明日かるゝと洗ひ清めくかくもぐさそし云終て
つゐに其卒都婆をぬきうちて先の小川に流し是を打ひして
家に帰り又翌日乙地松原といふる本堂よりかの寺に参り
終日又めそびらしてつゐに卒都婆を返さとて戻りて居ようと
さて小もひきされば其夜人まづより独かの裏堂より帰り小川
のりに流るゝとゝ忽其卒都婆をうして亡者に物せーとて
出て終に卒都婆を水に洗ひ清め是をかゝげて寺の後杉林乃
中墓所に立るとき挑灯已にきえて恐尺もあやうし暗夜なれ
ばいづくとりとの墓所ともわきまへかゝくよさづに石磯

地蔵のあるうんど接間しくかの卒都婆のぬけしる跡をさぐ
求れども数百立なるべしとる墳墓なれば夫に其呼にしたがひ
あるゝど已に時うつり必僕と立居ひとり言に気れ
て曰亡者卒都婆を返さと受取めと其言葉ようやうざるゝ
に其間六尺あまりも先うん墓のうちより陰火忽然と
燃上りて卒都婆をぬきとるあくぬるに又人ひうぬ予参るき
かの卒都婆を元のごく立合掌一拜をれば陰火消うせて又うと
玉の暗とかなりけり誠に無思論の説へあれも遊魂の怪や此

其九

関谷大島と云る呼の百姓某娘一人あり養子聟を迎ひ五年

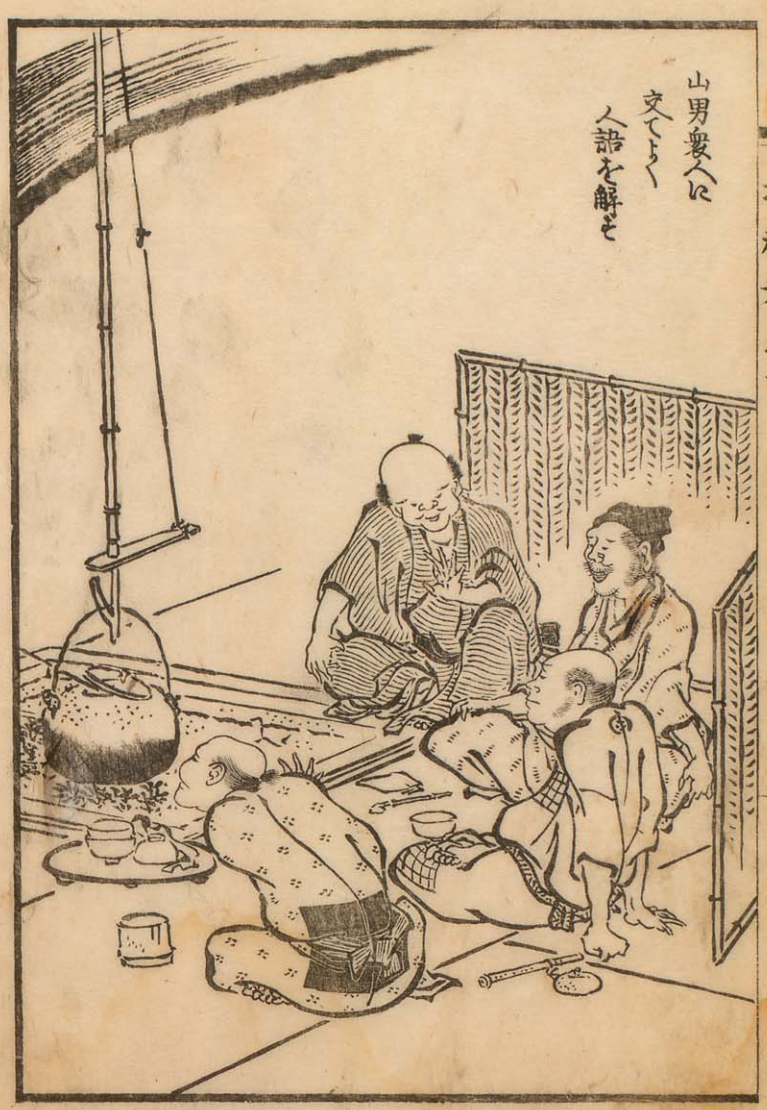
にして娘懐姙も老親夫婦甚ざ喜びいとりけるに其児生てのち
三日ばかり老母いと嘆きその死る児をいざきあげ汝果
報少く祖父祖母の顔も見知らで又黄泉に帰る事必再び生れ
かりて来るべし其下付くやんとく涙と共に却のれら指三
本に茶釜の下乃もえ式付死る児の眼をるで終に見と葬ぬ
扨一ヶせめまりと歴て娘又姙も生るくに及で其児即脱乃うに
三指のあく黒くあるく不仏十歳ざ別りの以まぐくあるしぶ次者
消うせぬ不ら美といへもあまりあり然りとも人ども世上中智の者
必式説を少て万物の生死皆式りのとのみ却へべるるど人智各
差別あるて百人にしくひとりも問ざる式乃儒仏神のこち

ろ士農工商そ日世間の交にいるまぐ仏れとろ異うとせん
いま仏を以これを論ぜんに煩悩即菩提生死即涅槃を見被
四大本に飯一性空に去く苦楽ろふまるく是を以大悟と
才一智とうると其下数十段にして不可ま仏名を称し別世界
と願ふに下愚の人に示すの方便ふしく勧善懲悪の教実に治
国平天下の奇法とうとべし智にして愚をそしるに明智ぬ
只式道上に以聖智なるべく下に以下愚るべし下をして必智な
しむべるるど上智にるくゆるうれとも得難く中智に疑且あるる
下愚にくくくてよく信ぜゆに見とるに手密に拠るに死後の
性に今の性を曳く呼にあるて仏とやうん鳥獣とやうん再び

式生と形(者死して又其性の託る所とくく生ざ人〜仏と感
別世界と形(者は死後の性かの西方十万億土外に居ていなる
仏とうのやうん寺は是を知るどかの十万億土外に居ねわるを
るくんべ又其先十万億土外に行行くば其性つねに真空より帰
きるなすべきる今の俗俗共に中智の業より空とくべ他の空
なること知て其己を空ざること知〜を神の道を行ひ
ど〜六根清浄をもつるを不能聖教を学んぐ行人を
不能仏と信じて其性を悟る不能煩悩止時をもて死に
者其性凝堅して不散粉なくして苦悲隙をきなり是
地獄と又生死の間に託を是を迷と又喜怒愛楽に公
と不停生死二つをもつ念を断ての死して其性真空に帰を是を大
悟の人と〜凡後の生を形(者かの渇ぎ〜の説をよろこべけれど
生は皆迷にして今の生後の生を不知後の生を又今の生をもつぎ
是を以るくべ予今貧賤下愚即死後たとく富貴上智の人に
生るとも今の我をること知すをんべ何ぞ乗〜ともるに是〜ん
只今の生人の富貴上智をもつ〜むぐくなるべ然べ大悟乃人
生死とくるの真空に帰もこと知れんにはかれる聖人の在も
仁義の性正〜く孝貞忠臣の行ひ不違今の生を守り得るを
死も又安然〜て迷人呼を〜豈大悟の人に異をんや

其十

妙高山黒姫山焼山皆これ山なりそれより方山おこり信州戸隠鉢中之山にいたるまで数十里に連りつゝそのの深遠いべくもなし高田藩中数千家の薪皆此山中より伐出すこと年々化生のより本挽山の峯にのぼるまで各誓て曰山小屋の在中いつなる怪のありとも人よかるべからざるより一年件山某此役にあたりて数日山小屋にあるに夜こと人ぐ打来り火を焚くこと不絶これをかこゝに炉にあるをみるに山男とて身ひろく来りて焚火にあたり一時ばかりにして去其形人倫に異なること色赤髪裸身灰黑色長六尺ばかり腰より下木の葉をまとへる外に物いふことなけれども声を出すこと牛


山男婆人に
交てうく
人語を解す

のど又ゝく人の言葉を聞とくる相別く知る人のほど一々弁山氏
是に謂く曰汝木糸をまとゝ人へ其孤る舟を知る火にあらゝ
宅をかくるゝ然ば汝夏冬とゝなく裸身にしく宅暑堪さる
といへにもあらぬ何ぞ獣皮をとりて暖る身にまとゝざるを
山男つゞく是を聞ゝ去却ぬ三夜忽羚羊二疋を両のよさげ
て来り弁山がまへにちく弁山其意をさとり短刀をぬきその
皮をとりて山男に与へ山男ちきりに感開き打笑ひ去ひ
去それより二夜目又小熊一匹鬼一匹をかゝりて是を小屋の中へ
なげ入て去ゝ已にしく又来る人ゝ是を見れば先の皮一枚ハ
背を覆ひ後をとりてつゞき合せ一枚ハ腰を纏ふ其生皮を

そのまゝそこらの人乾くに困くらぶこと彼張り肩く折りて
候く然の皮をとり十文字にさと竹式れ小屋の形にしげてその
裏にわらぶ坪へ弥山又是に山刀白さやう一丁式わくて
其後数日不来とゝり手足を歩て按ずるに凡山男山女とゝる
八鬼神の術のるゞく言ゝくれど全く左にあらざるべし
即山中自然の人形にく言ゝ拙者とゝけれバいろ〳〵服装
こゝ式ちぶれ〳〵裸なるものにて只東地五十年前の風俗に同
じく愚の甚しきものなるべしく是にも人道のてゞくを教バ
いろ〳〵んとそこのこゝ文化甲子の夏信州にあそび出倉山と
言るる山に出て山女の住る所式凡三所あり古所ゝ

谷式隔て古木林中にあり山燕の巣甚ざ多し〳〵今所とゝるゝ
其上絶壁の中腹に在く下より仰ぎて数十丈かの山女ゝ凡人
ざれども所の口草苔の生るゝ甚ざ奇異なりいろに住るもの
のるゞ〳〵雪中に山の中大なる足跡ありとゝり

其十一

高田大工又兵衛才某西山本に雇れ数日留りけるゞある夜急
ける私用ありてひとり山路式ゆきしに泗石の〳〵間りとる所にて
不慮大人に行逢ゝり其形赤身にて長八尺ばかり髪肩ゝれ
目の光星のごゝくよに鬼一ツと捉ちづに歩行乗大工驚て立止き
いかの大人を怒るさまにく立止りしゞつるにおもいろゞ恐式

渓ぎりて山に登り去りぬとそう是ホ古かの山男なるべし

其十二

神田村に邑新左衛門と云るものあり其性暴悪にして物の命をとること草を苅るごとし里人親族と云ども恐て近付ず

んでおいとゝ云に村をさること十餘丁山神の小社あり其下

流混〻と小る甚はゞ〻と云ども里人殺生を禁じて是を

こゝろざして冬狩たゝ者中にひとり其所にあり縋縄を

引ぎりて名狩をすること夜ごとに甚はゞ〻ある夜又いつゝく

縄をとゝくに背より名一ツも不来夜半にも又きたるごとに已に

曉方なんで山の上より行ともきゝごと氷さる雪のうへをりて

歩行なる音を狩たゝ小屋の中より窺に是を聞ひろげ

其長一丈あまりなる男髪目の上に覆ゝるゝ出来まり狩

たゝ恐れて声も出ず小屋の中よりゝ居りゝにかの大男

近くあゆみ来り小屋の中へ其のぞくなるを狩たゝを

つゝ出ゝなげ捨ゝうと抜ぐゝて気絶ゝぬさゝく夜明

家の女房狩たゝが帰りの常より遅き狩以ぶゝくかの小屋に

いとゝ見れば居ゝゝゝ又是跡もなゝ女房巻るきたかゝ是と村老

行ひ人と出ゝ山ゝ谷ゝ不殘尋ね求るに北谷二ロとさゝく狩

たゝ雪中にたゝれ死を人ゝ凍てたゝけ来りゝく家に入茶

とそゝぎ煙ゝうんとゝけるに一時あまりをゝざて人心地付ぬ

殺生ハ止されども三年と不待して卒ぬ依山の奇なり雑

其十三

新浮真伸寺ハ大精舎なり寺中の僧某秋の夜いとゞ物
寺にかゝるとく独住侘小家の形ハ通りとゞ忽仏燈しく
なりて身の毛ゞちあるゝ顧きゝ藁葺の厠の屋根に南瓜
ちげまとゝる姿の月にまとゝる人の死一ツありてかの僧と
向ひ莞爾とゝゝ僧答き声を出しもちゝる杖にてかゝ
頭とゝゝに打その声に近所のゝゝ見ハ出そこ同人
僧の曰化おゝ紀きよくゝ不どに近傍皆て聚き出て火
とゝゝ見とゝゝ南瓜に杖の打ゝるあゝゝあれへ

人の頭にゝあゝゝ南瓜あゝゝなりけりと笑ひけるに僧大已が
臆病と恥ゝゝ其南瓜と打ゝゝにゝゝと声あゝゝ怪ゝ
者のかけとさゞ求るに忽大物子のどゝゝる蟇一ツ素のかげに
ゝゝ居ゝゝ取ハ山人せゝゝりとそつゝに打殺しぬ博物志
に蝦蟆の三奇ハ出を釈文に蝦蟇おと呑んとして口ハ開け
ゞ其気おを引来りて却のれとに入ゆゝるひきと言又千里の
外に捨れども一夜の中に戻り来るゆゝにかゝると和訓とゝあり
予　文化元甲子の夏六月信州巻益里山中松巌禅寺に帰
留ゝ障壁に画と数日其寺の後園に大蝦蟇数十あり て夜
昏より群ゝと出四方に乱走て食を求むそのこゝがらくと

嘗しさるまさぶ短夜の眠とさまたさるを連夜うり兒に依て予堂頭和尚に謁し此事以かの墓を他所に移さんと欲ふ和尚の曰されば一年江湖の僧ども打寄て此蝦墓探究とさるなくとく一夕洞にうり敗出る式さ人おく侍二ッに入門前の急流にさそ〻しぶれ出るうり来て元のとしかと労して切るしと予兒を歩てさでに蝦蟆の二奇を知る今一奇なり密室に封ぜとゝども一夜ふして出るとゝうあまた兒を試ぜどと諸りけるに若き僧達その夕窮に大墓一ッとゝ人兒を鉢盥に入板石以蓋とゝ其上に石式大石式のゞせ我枕にちき陳子の外に抱きて以その奇を試んとを

却て夜他の蝦墓がうくとゝるけるいかの鉢盥中只時ゞうく
と微声あり予も又眠ることあるゝど丑の時以ゝうり寺僧起出
て堂上に読経の声喧しく例ゝ明七ッにもなりんと却て鉢盥
四方に散乱せる蝦墓忽庭に聚まり其鳴声数百殺ゞ
しゞ忽其声止ゝく蕭然とおもゞ又鉢盥中の声も不聞
うぬ予怪〻ゞ臥居るにそや若き僧達二三人走
来りいろにと問に依て予も起上りかの大石式のけ板石式とり
て鉢盥中を見るに丈に一抱ゝ不思議とゝも式あまを
あり凡蝦墓爲を怨るゝ犬猫とゝどもさゝに省ぎ石式
さけてゆく実に蝦墓ハ虫類乃怪物なり此一事他邦乃等

されども因よめぐ

其十四

村松の諸士河内谷の淺流に釣を垂るゝ其常なる人に
その坐すべき岩憩へべき木蔭流のよゝなんどあれ各坐
とも入る術をゝ居れり一日茂田某ゝも岩頭に立て釣
もれども盈る比まゝ魚一ツも不得ゆへに方仗を脊川の淺
流を下り遥なる小上にのぼりて其ほとりしき平伏さぐるに
山陰浪く渕に臨でなすあるゝに疾立る岩一ツあり凡畳三帖
ばかりも表へ即其上に坐ゝ釣を垂るに又一人の士川向
ひの岸に来りて釣をするや久ゝして川向ひの士急釣竿伏

岩とおもひて
怪物乃
頭に
釣を
しかる

かさねたるこの方に向ひ密にもまぎれさりてあくゆんて伏ゆび
さす教てものとも言どあらくふさめき川下へ逃去りぬ後田氏
も何ら心淋しくなりて学にあぐり元の乃武ゆり浅倉へ行
其人に走り付く何へのゆやと問彼士大息つきくあ也くい
不知小即公の坐しる岩忽両眼を開大なるに少しあけく
めくびとりさなにくく又眼を開しり其眼中赤の火乃ごとく
光て恐しるど言ならり色是必蝮蛇なるんとく逃ゆりぬ後
明友お伴て其所に行て見しるどもかろ岩とおぼしきもの
なりと云ひ是も山中大蝦蟇なるべきる

北越奇伝巻之四終